



永久平和を願って 次世代に戦争体験を語り継ぎたい

私の戦争体験談 19

●高松空襲

当時、私は13歳の少年でした。早くに母を病気で亡くし、兄は軍に入隊して関東へ。父は住み込みで働いていたため、実家は高松市の塩上町にありましたが、離れ離れに暮らしていました。

そして、昭和20年7月4日未明に起きたのが高松空襲です。

その時、私は同じ市内の浜ノ町に住む叔母の家に身を寄せていました。深夜、空襲警報のサイレンが鳴り響き、叔母の家にあった防空壕に二人で逃げ込んでいまし

た。今日も空襲はなかったと安堵していたそのときでした。ドカンという爆音が耳をつんざき、地面からは体を突き上げるような衝撃が伝わってきました。防空壕から顔を出し、東の空を見ると火柱

が上がっていました。アメリカの爆撃機B29が焼夷弾を落としました。容赦ない爆撃は続き、高松は火の海と化し、辺りを

切なる願いは

戦争のない平和な世界

土器町 菊地 数雄さん



菊地数雄さん(当時9歳)

明るく照らしました。

後に公表された報告書によると、B29爆撃機116機による空襲は午前2時56分から106分間続き、市街地の約80%が被害を受け、死者1359人、負傷者1034人、行方不明者186人など、数字からも相当な被害だったことが分かります。

夜が明け、辺りを見渡すと市街地は焼け野原。残っていたのは警察署や三越、高松駅など建物数棟

のみ。私は見たこともない光景にがく然としました。

息つく暇もなく今度はグラマン戦闘機が飛んできました。グラマンは、日本の零戦と空中戦を演じたアメリカ海軍の主力戦闘機です。そのグラマンは低空飛行から動くもの目掛けて機銃掃射。逃げ惑う人々を執拗に追い掛け回しました。なんとか命拾いしましたが、警

察署で一人にひとつ配られていた玄米のおむすびを手に、祖父母を頼って志度に向かうことにしました。

途中立ち寄った栗林公園の池には皮膚が焼けただれた死体がたくさん浮いていました。爆撃を受け、その熱さから水を求め飛び込んだ池は、焼夷弾の熱で熱湯になっていたので。その有り様は、あの穏やかで優美な佇まいの栗林公園からは想像もつかないような地獄絵図でした。軍は池に浮かんだ死体を次から次にトラックに乗せ、当時火葬場のあった沖松島まで運んでいきました。その数がありにも多いため、荷台には折り重なった死体が山積み状態。また、道にはまだ煙が上がる黒焦げの棒のようになった死体がたくさん横たわっていました。それらを尻目に、私は無我夢中で志度を目指しました。

●志度での思い出

高松空襲の2日後、7月6日に再びグラマンが現れました。志度の大串半島の西沖に停泊していた空母目掛けて機銃掃射を浴びせました。結局空母は沈没し、近くの集落も銃撃の被害に遭いま

した。

志度に居たころ、私は小田の国民学校に通っていましたが、最初はよそ者扱いされ、しばらくは辛い学校生活でした。その中でも印象に残っている出来事が2つあります。

1つは、同級生が海岸に捨てられていた機雷から信管を抜いて、学校に持ち帰ってきたこと。子どもだったので、深く考えず、遊びのつもりでした。信管を机に打ちつけた瞬間、信管は爆発。その同級生は手首から先が吹き飛んでしまいました。そばで見

ていたほかの同級生も大げが。私自身も飛んできた破片だけがを負いました。

もう1つは特攻服を着た死体が流れ着いたことです。漁師さんはその死体を船に乗せ、陸まで運んできました。上陸させた後は子どもたちも手伝い、学校の講堂まで運び入れました。軍服の名札や階級章から鈴木少尉ということが分かりました。お坊さんがお経を読む横で手を合わせました。長い間水に漬かっていたため、肌はプヨプヨで、腹はパンパンに膨らみ、真夏のため腐敗が進み、すごい臭いを放っていたのを今でも

忘れられません。

●今思ふこと

昭和20年8月15日、天皇陛下が終戦を告げる玉音放送があったとき、近くでは戦闘機がまだ銃撃戦を繰り返していたものから、終戦を迎えたという知らせにピンときませんでした。

その後、15歳で県外の造船所の船大工として弟子入りし、九州の造船所を転々とした後、35歳のときに香川に戻ってきました。家族にも恵まれ、今は幸せに暮らしています。

終戦から約75年、私のまわりで戦争を体験している人も段々と少なくなってきました。本当に戦争はするものではない。私が体験したことを、今の世代の人に知ってもらいたいと思い、お話をしました。

